

1960年代の Garfinkel と『エスノメソドロジー研究』

神戸大学 榎村志郎

1 目的

『エスノメソドロジー研究』（以下では『研究』と略称する。）（Garfinkel, 1967）の序文によれば、この書は著者 Garfinkel と共同研究者たちが 1960 年代までに行った研究を集めたものだ。『研究』の各章は、エスノメソドロジー（以下では「EM」と略称する。）研究運動を代表してその方法論を宣言したものとみなせる。だが今日まで、その実践者は別として、『研究』も EM 研究もどのようなそれ固有の学問的関心の下に出現したのかが必ずしも問題にされてこなかった。それらは主に社会学の既存のパラダイムとの対立や系譜的類似性の観点で理解されたからである。ここで既存パラダイムとは Parsons 社会学、その他の実証主義社会学、Schutz の現象学的社会学等を意味する。EM 研究の実践者間でも対立や諸解釈があり、その問題の解明がなお十分でないと感じられる。本報告は EM 研究の方法論の成立をそれ自体の背景や目標から解明することに寄与しようとする。

2 方法

本報告では、1960 年代の Garfinkel の研究関心のいくつかをあきらかにすることによって、『研究』の理論的意味に光をあてようとする。もっとも 1960 年代の Garfinkel の研究活動は多彩かつ膨大なため検討はその一部に限定される。資料は、UCLA の図書館に特別コレクションとして所蔵されている Garfinkel Papers Collection である。このなかから、1962 年秋の Garfinkel の EM セミナーの反訳の一部、1963 年世界事情会議でのラウンドテーブル”Reasonable Accounts”での諸報告、1967 年夏の ASA 大会で発表された Sacks との共著報告（”On ‘Setting’ in Conversation”）を検討した。また、1963 年 2 月の日付がありその後継続されなかったらしい原稿『Parsons Primer』も一部検討した。

3 結論

社会秩序の成立の解明を中心的主題とする EM の中心的現象が人々の（日常的また専門的）実践だということ、そしてその実践は社会学やその他の社会秩序についての専門家からの助言なしにできずに行われなければならないことは、Garfinkel によって 1960 年代以前にすでに確信されていた。60 年代の研究は、この実践を、社会学の慣習的言語（行為や規範という専門社会学的概念）に頼らずに、また、（人々とともに）検証可能な形で明晰かつ再現可能に獲得する方法と理論の開発に向けられていた。EM はそのような方法と理論の集成として前例のない社会研究として出現した。『研究』第 1 章「EM とは何か」で述べられる、EM のトピックのもつ 3 つの「その問題の構成的現象」（同書、4 ページ）は、人々が相互に知り合い伝達しあうことを通じて社会（種々の部分社会を含む）を構成する実践のその社会のメンバーがかかわる方法論的性質である。『研究』第 1 章は、とりわけ Garfinkel と Sacks との 1960 年代の共同研究の成果と密接な関係にあり、それらが社会をつねに動的に構造化する方法を発展させる原理であるとともにその研究可能性を保障するものであることを、経験的、暫定的、発展的な知見として、宣言したのだといえる。

参考資料（ウェブサイト）「エスノメソドロジーの発展」（榎村作成）

<https://sites.google.com/site/shirokashimura/Home/formative-works-of-ethnomethodology>